

# 天子単于瓦群と磚の新発見

佐川正敏（東北学院大学）

## はじめに

イデルハンガイ氏が2017年に発見し、2020～2022年に発掘したモンゴル国アルハンガイ県のハルガニン・ドゥルヴルジン遺跡とその城壁に葺かれた「天子単于」銘軒丸瓦は、「龍城」説を含めてモンゴル国内外の匈奴・秦漢考古学者や歴史学者に大きな衝撃を与えた（T.イデルハンガイ 2022）。それが北西5kmのハルヒラー川1遺跡（以下、KHG-1）の2号窯跡周辺で焼成されたことが、臼杵勲氏等の2023年の発掘によって明らかにされた。筆者は、2号窯跡出土の瓦磚を現場で全点チェックし、その内の重要な特徴をもつ瓦磚を選別して分類を行い、記録や撮影を行った。本稿では、その結果の概略を述べ、国立チンギスカン博物館に展示中のハルガニン・ドゥルヴルジン遺跡出土の「天子単于」銘軒丸瓦等や筆者等が2022年まで発掘してきたヘルレン川上流域の中央県のホスティン・ボラク3遺跡を含む匈奴時代の瓦磚と比較する。

## 1. ハルヒラー川1遺跡2号窯跡出土瓦磚の特徴

### (1) 2号窯跡出土の瓦類

「天子単于」銘軒丸瓦、不明銘軒丸瓦、丸瓦、平瓦、線刻平瓦について述べる。すべて破片で、窯跡内に廃棄、あるいは流入したものであり、焼成部の床面に取り漏らされたような瓦はなかった。

**「天子単于」銘軒丸瓦** 燃焼部埋土①層から2個体出土した。1個体目は、内区が円環文を伴う直径4cmの半球形文で、外区残存部に1行目の「天」字、2行目の「天與」字、3行目の「歳萬千」字が見える（図1-1）。「萬」字下部にやや大きい范傷がある。瓦当直径は推定160～170mmである。瓦当裏面には粘土円筒の篋状工具による堤状切り残しがある。2個体目は、外区残存部に1行目の「于単于」だけが見える（図1-2）。瓦当直径は推定170mmである。丸瓦部凸面には広く平行叩き目が施され、凹面の叩き目はほぼナゲ消されるが、ごく一部に粘土紐巻き痕跡を残す。側面は、粘土円筒が篋状工具で分割された後に数回ケズリ調整される。

**不明銘軒丸瓦** 燃焼部埋土4層から1点出土した（図1-3）。内区は不明で、外区残存部に「子」字を思わせるハート形文がある。外縁には圏線2本が巡らされる。この特徴をもった軒丸瓦は、「主壽臣忠」銘軒丸瓦を含めてハルガニン・ドゥルヴルジン遺跡では、従来出土したことがない。

**丸瓦** すべて玉縁式である。大きさは、全長が330mm以上（図2-1：国立チンギスカン博物館展示品を参考にすれば400mm前後）、玉縁長が38～48mm、胴部長が不明、広端部幅が152～160mm、胴部厚が10mmをやや上回るものが主体だが、10mm未満の薄手品も若干ある。調整は、凸面に縦位平行叩き目を施すことが基本であるが、広端部寄りの幅20mmをナゲ消し、沈線で区画する例がある（図2-2）。凹面は、叩き目をナゲ消すことが基本であるが、当て具風の短めの平行叩き目を残す例がある。そして、凹面の広端部寄りに幅13～27mmでケズリを施す例がある（図2-2）が、つぎの玉縁部への収まり易さを意図したのであろう。側面は、篋状工具で二分劃した後に凹面寄りを3～5mmで面取りされることが基本であるが、さらに凸面寄りを3～5mmで面取りされる例もある。凹面に布目痕が確認されないことから、内型（模骨）なしの粘土紐巻き作りで成形されたといえる。

**平瓦** 大きさは不明（国立チンギスカン博物館展示品を参考にすれば400mm前後）だが、厚さは11～22mmである。調整は、凹凸面ともに縦位平行叩き目が施される。その後、凹凸面の狭端部寄りに回転による幅16～42mmのナゲが施されることが基本であるので、回転台の使用が考えられる（図2-3）。側面は、篋状工具で分割後にケズリ調整で平坦にする場合と、さらに凹面寄りを3～5mmで

面取りされる場合がある。凹面に布目痕と側板痕が確認されないことから、内型なしの粘土紐巻き作りで成形されたといえる(図 2-3・4)。なお、平瓦破片の中には、切り餅を焼いたときのように大きく膨らんだ状態の例が多数見られた。調整時の叩き締めの不備が原因と考えられる。

**線刻平瓦** すべて平瓦で、その凸面(3点)か凹面(1点)に焼成前に波状文や沈線文、S字文やL字文の幾何学文を横方向主体に線書きしたものである(図 3-1~3)。

## (2) 2号窯跡出土の埴

埴は、一辺 270~280mm の正方形と推定され、穿孔と装飾の有無から三類に分類される。

**I種** 無孔埴である(図 4-1)。裏面に残された約 40mm 四方の当たり痕を埴の中心に残されたものと考え、一辺 270~280mm に復元される。正面と裏面には平行叩き目が施される。厚さ 16~20mm の普通品 A 類(15点)と 23~27mm の厚手品 B 類(5点)がある。

**II種** 対角線上の四隅と中央の 5 箇所を焼成前に円錐形の工具で両面あるいは片面側から穿孔される。これは壁面に固定するための釘孔かもしれない。中央孔から側面までの残存長から、一辺 270~280mm の正方形と推定される。正面と裏面には平行叩き目が施される A 類(図 4-2 : 8点)と矢羽根状叩き目が施される B 類(図 4-3 : 1点)がある。厚さはともに 19~23mm である。この種の有孔埴は、ハルガニン・ドゥルヴルジン遺跡で従来出土したことがないので、城壁跡と南門跡ではなく、中央基壇建物跡で使用されたのかもしれない。

**III種** 断面半円形の凸線が 3 列残されているが、一辺 280mm の正方形であったとするならば、凸線は間隔が約 56mm で 6 列あったと推定される(図 4-4)。I種と II種と比べて、正面は黒みが強い。裏面には平行叩き目が施される。この種の埴は、ハルガニン・ドゥルヴルジン遺跡で従来出土したことがないので、城壁跡と南門跡ではなく、中央基壇建物跡で使用されたのかもしれない。

## 2. ハルヒラー川 1 遺跡 2 号窯跡出土瓦埴の比較

### (1) 2号窯跡出土瓦類と他の匈奴時代瓦類との比較

**軒丸瓦** ヘルレン川上流域のホスティン・ボラク 3 遺跡(KBS3) 1・2 号窯跡やテレルジン等の土城遺跡から出土した軒丸瓦は、瓦当面を四区分して羊角文や C 字形文、S 字形文を規則的に配置する文様を主体とし、銘文を含まない(図 6-1~8 : 佐川ほか 2023)。内区文様は、方形の凹みを伴う半球形文か頂部が平坦気味の半球形文である。KBS3 とテレルジ土城には瓦当直径が 150~170mm の普通品と 190~222mm の大型品があるが、他の土城には普通品しかない。普通品の瓦当直径は、前漢等とも共通するサイズである。しかし、瓦当裏面には粘土円筒の篋状工具による堤状切り残しがあることから、粘土円筒篋切り技法で製作されている。しかし、これは戦国~前漢時代初期のオルドス地域や首都地域に見られる粘土円筒円孔糸切り技法と異なるし、前漢中期以後の首都地域に見られる分割丸瓦接合技法(二分割後の丸瓦を瓦当に接合)とも異なる古式の技法である(図 6-11~16)。

一方で、KHG-1 とハルガニン・ドゥルヴルジン遺跡の軒丸瓦の文様は、採集品も含めて目下、銘文だけに限定され、内区も比較的整った半球形文であり、ヘルレン川上流域例とは大きく異なる(T. イデルハンガイ 2022)。その瓦当直径は KBS3 等の普通品とおおむね共通する。国立チンギス칸博物館展示品の「天子單于」銘を観察して比較するならば、字形の相異から少なくとも 3 範以上の同文の木範があったことは確実である(図 1-5~7)。これは、城壁等の屋根に大量に葺くために講じた生産方策であったと理解できる。

しかし、「天子單于」銘の 3 行目は本来、右から「歳萬秋千」とすべきであったが、「秋」字をすべての木範で入れ忘れていた。また、篆書の字体には粗雑なものや不揃いなものが目立つ。したがって、篆書体の吉祥句をある程度知りつつも、字のバランスや彫刻技術に習熟していない者が作範したと考えられる。なお、劉慶柱氏の見解に基づけば、「天子單于」銘のような「十二字瓦当」は、その製作技法がすでに分割丸瓦接合技法であることから、前漢中期、すなわち武帝段階以後の軒丸瓦であるという(劉慶柱 1985)。

**丸・平瓦** 丸瓦と平瓦は、両地域ともに共通する特徴をもつ。成形は内型なしの粘土紐巻き作りという古式な技法によるが、全長は400mm前後を有し、これは前漢等とも共通する。調整は、両地域ともに凹凸面に平行叩き目が施され、凹面がナデ消される場合が多く、側面が分割後に凹面寄りや凸面寄りを篋状工具で面取りされる。縄叩き目調整はまったく存在しない。

## (2) 2号窯跡出土磚と他の匈奴時代磚との比較

ヘルレン川上流域のホスティン・ボラク3遺跡(KBS3)1・2号窯跡や他の土城遺跡から出土した磚は、正方形磚と長方形磚がある(図5-21・22)。その一辺あるいは長辺は漢尺の1尺の約230mmであり、短辺は8~9寸の185~210mmである。KBS3の場合、厚さは30~36mmの厚手品と19~26mmの薄手品がある。正面の文様は、四隅からの凸線で四分割し、そこに網代風の文様を彫刻した木型に粘土を詰め込んで表出されている。

これと比較してKHG-1の磚は、大きく異なる。正方形磚だけの可能性が高く、また一辺が漢尺1尺の約1.2倍の280mm前後である。I種もII種も調整用叩き目を残すだけで、文様を付けない。II種のような有孔磚とIII種のような独特の装飾磚は目下、匈奴時代初の発見である。

## おわりに

ハルガニン・ドゥルヴルジン遺跡とKHG-1の瓦磚は、ヘルレン川上流域の瓦磚と比較した場合、軒丸瓦と丸・平瓦の成形技法と大きさ(瓦当直径大型品を除く)が概ね共通している。しかし、両者の軒瓦文様の差と磚の諸特徴の差は歴然としている。とくに、前者は城壁が「天子單于」銘、南門が「主壽臣忠」銘軒丸瓦(図1-4)と単純な構成であり、葺き替えを伴う長期使用の可能性が低い。後者については、KBS3のK1・2の三段階の操業で14類もの軒丸瓦(図5)が生産されているので、テレルジ土城の長期使用が想定できる。また筆者は、軒丸瓦文様の型式差から見て、土城がテレルジ→フレート・ドヴ→ゴア・ドヴの順に南へ移動する可能性を考えている。以上のことは、ヘルレン川上流域が匈奴の国家的中枢として長期間重要な地域だったことと関連しよう。

劉慶柱氏の見解に基づけば、十二字瓦当に属する「天子單于」銘軒丸瓦の年代は前漢中期以後ということになるだろうが、丸瓦部を含めたその製作技法は、内型を使用しない戦国時代のものに相当する古式な技法である。オルホン川上流域とヘルレン川上流域には古式な造瓦技法自体が先行して存在した状況にないので、元来内型を使用しない土器製作に従事する匈奴の工人が瓦製作に動員され、吉祥句を刻した范型を含む瓦当直径や全長などの前漢時代の仕様に則して製作させた結果であると考えられる(佐川ほか2023)。KHG-1の2号窯跡の年代測定の結果が待たれる。

なお、筆者は今後、イデルハンガイ氏のご支援の下、まずハルガニン・ドゥルヴルジン遺跡出土の「天子單于」銘軒丸瓦と「主壽臣忠」銘軒丸瓦を詳細に観察し、范型数について確定したい。つぎに、保存の良好な丸瓦と平瓦についてもその大きさを中心に詳細に観察し、KHG-1で提示した丸・平瓦の特徴について検証したい。さらに、ハルガニン・ドゥルヴルジン遺跡出土の磚についても、KHG-1の三種の分類に照らして再検討したい。

## 参考文献 (アルファベット順)

- 劉慶柱 1985「秦“十二字瓦当”時代質疑」『人文雑誌』1985年4期(劉慶柱 2000『古代都城與帝陵考古学研究』中国・科学出版社に再録)
- 佐川正敏・白杵勲・L. イシツェレン・木山克彦・柳本照男・正司哲朗 2023「モンゴル国ホスティン・ボラク3遺跡の匈奴時代窯跡における瓦磚生産と比較研究」『第22回 北アジア調査研究報告会 予稿集』北アジア調査研究報告会実行委員会
- T. イデルハンガイ 2022「ハルガニン・ドゥルヴルジンの匈奴の單于の夏の宮殿発掘調査結果から」『遊牧帝国の文明と現代社会』昭和女子大学

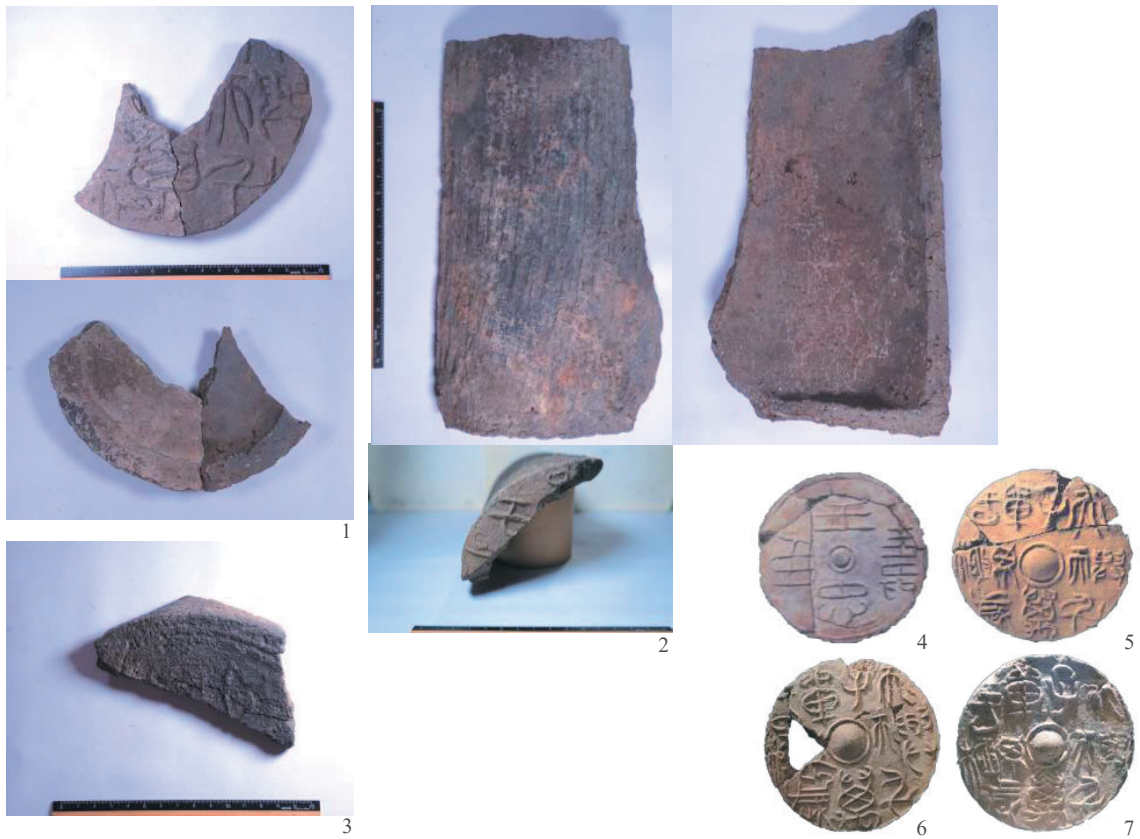


図1 ハルヒラー川1遺跡2号窯跡出土の「天子單于」銘・不明銘軒丸瓦及びハルガニン・ドゥルヴルジン遺跡の「天子單于」・「主壽臣忠」銘軒丸瓦

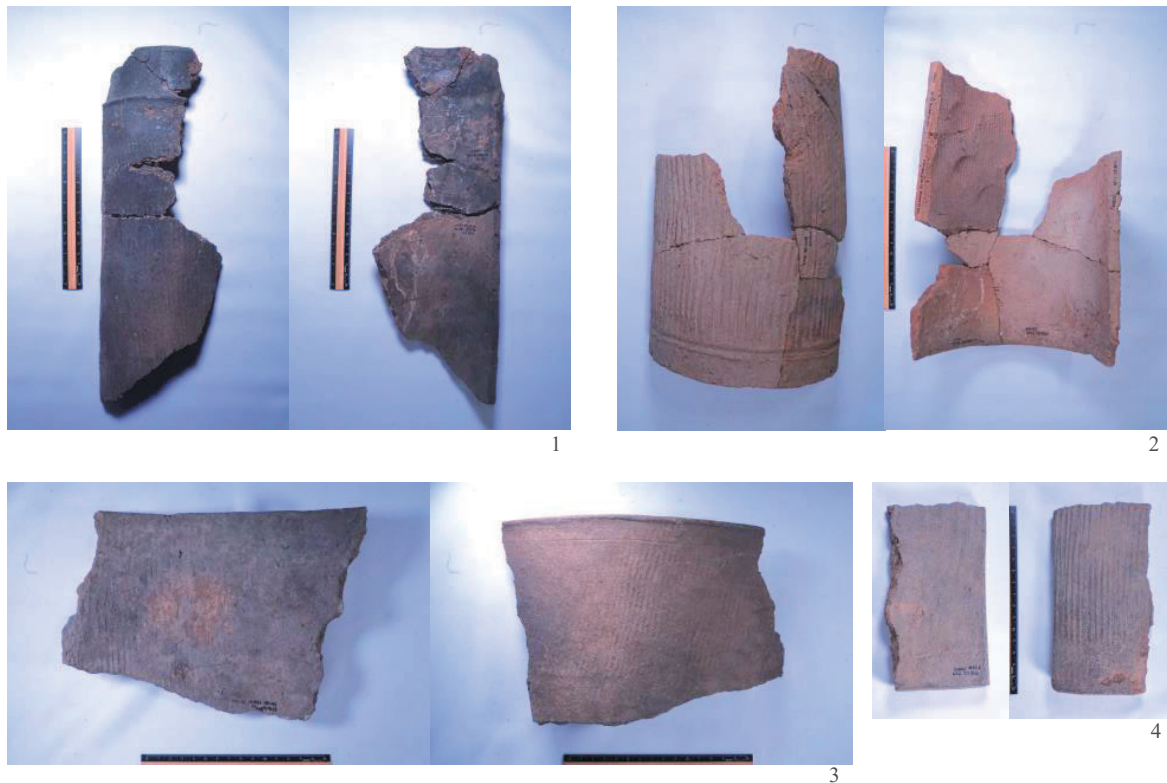


図2 ハルヒラー川1遺跡2号窯跡出土の丸・平瓦



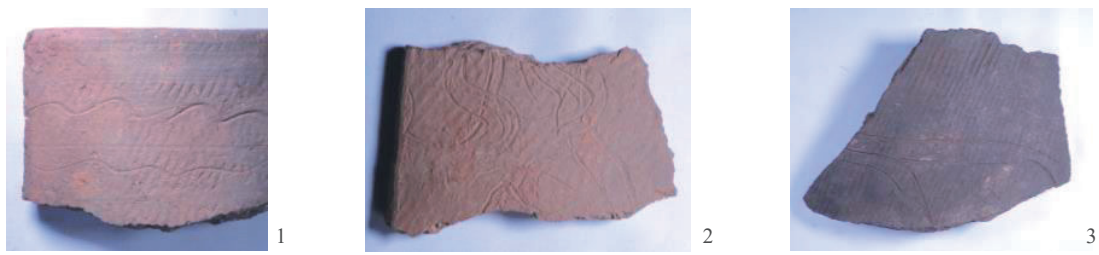


図3 ハルヒラー川1遺跡2号窯跡出土の線刻平瓦

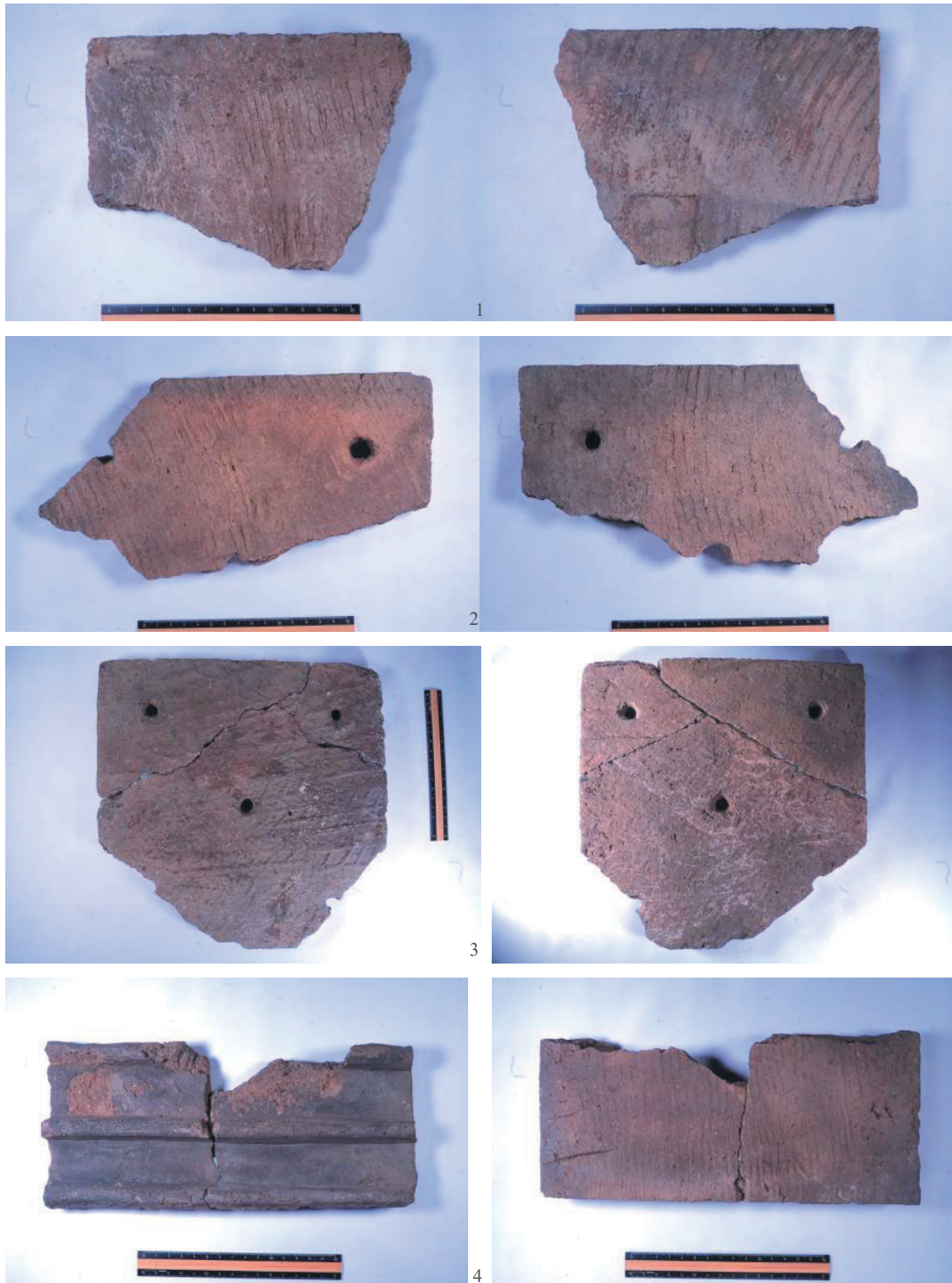


図4 ハルヒラー川1遺跡2号窯跡出土の埴



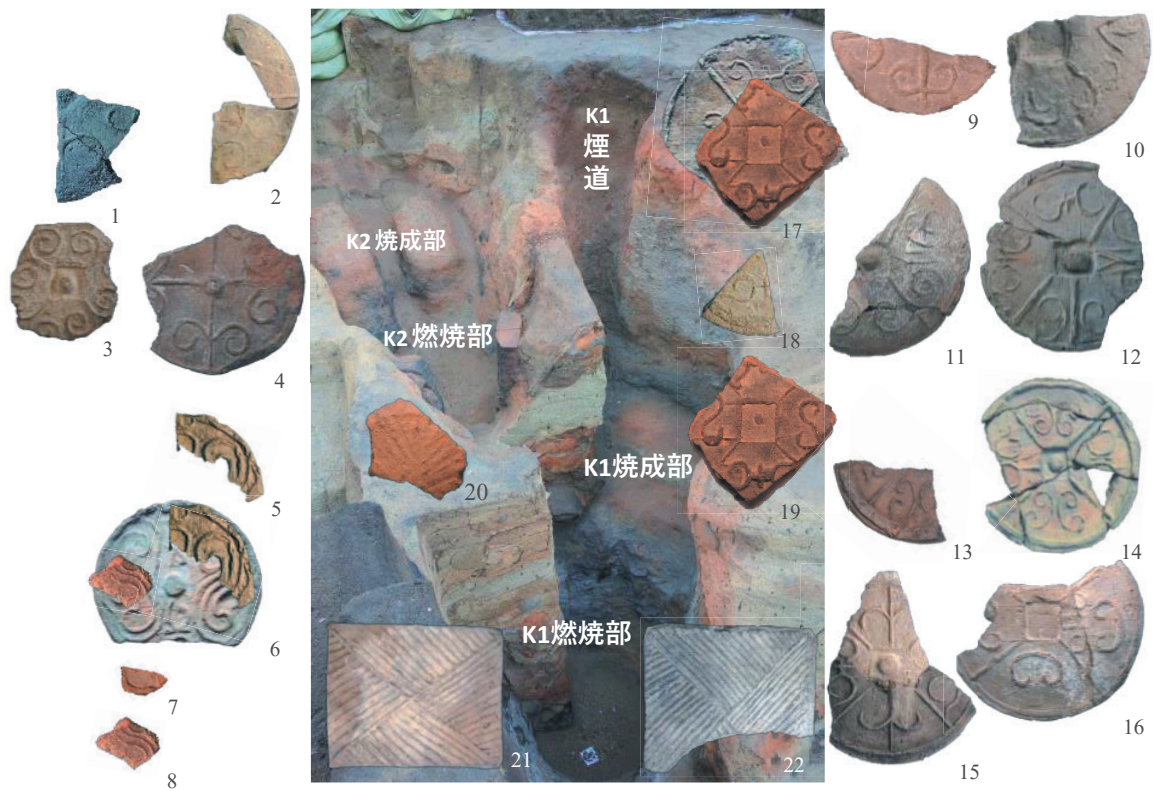


図5 KBS 窯跡 1号窯跡 (K1: 右), 2号窯跡 (K2: 左) と生産された軒丸瓦と埴



図6 ヘルレン川上流域 (上), オルドス地域 (中), 統一秦・前漢首都地域 (下) の軒丸瓦